

19 世紀末の米国における円環の構図

—Stephen Crane、ツーリズム（リスト）、（車）輪の力学—

増 崎 恒

Spinning the Wheel :

Stephen Crane Seen from the Context of Tourism/ist in Fin-de-Siècle America

Ko MASUZAKI

は じ め に

The crowd upon the beach is so big that it overflows into Asbury Park on the north and Ocean Park and Bradley Beach on the south. Daily excursion trains come here from all parts of New-York, New-Jersey and Pennsylvania, but the people who come here for a day are lost in the immense crowd of humanity which has come here for the season.

Down near the beach are a number of contrivances to tumble-bumble the soul and gain possession of nickels. [. . .] On the lake shore is an “observation wheel,” which is the name of a gigantic upright wheel of wood and steel, which goes around carrying little cars filled with maniacs, up and down, over and over.

On the distant dunes were set many little black cottages, and a tall white wind-mill reared above them. No man, nor dog, nor bicycle appeared on the beach. The cottages might have formed a deserted village.

1889 年と 1892 年の *New York Tribune* 紙、1897 年の *McClure* 誌は、米国の「海浜」(beach) リゾートの賑わい、敷地内に附置された「観覧車」(observation wheel) の活況、無人の「海浜」(beach) の情景の侘しさ、を伝える (W 5: 88; 8: 512, 533)。ニューヨーク市を本拠とするメディアの権威の下、米文学作家 Stephen Crane (1871-1900) が 19 世紀末を生きる中産

階級米国人読者に向けてこれらを発信する。この事実に着眼するとき、遺伝と環境の影響力に抗えない人間の卑小性を強調する、米文学史上の伝統的な分類「自然主義文学」の埒外から作家を見直す道が開けるのではなからうか（Solomon 4）。この仮説に従い、「海浜（リゾート）」、「列車（＝鉄道）」、「観覧車」、「（車）輪」、「自転車」、「群衆・人間」という要素を上記の引用から抽出して整理する。鉄道・観覧車・自転車を、海浜（リゾート）を舞台に、その利用者（＝観覧車・鉄道の乗客、自転車乗り）と対置させる構図が浮かぶ。wheel で形象される観覧車、wheel(s) の回転運動で前進する鉄道・自転車、が提供する非日常的な諸事に興じる海浜（リゾート）客たち（＝ニューヨーク市中の中産階級米国人）の姿にこれは合致する¹⁾。

この時代の米国社会は空前の観光（＝ツーリズム）ブームに沸いていた。19世紀、米国のホテル数は激増する。鉄道路線の整備拡張等による輸送手段の進歩発展の結果、米国は地理的・経済的に拡張する。輸送と宿泊は本質的に結び付く。米国の東部と西部が繋がる。19世紀末までに、例えば、（東部から見て遠方の）西部を巡るツーリズムという社会文化的文脈の中でホテルは役割を見出す（Sandoval-Strausz 48, 110-11; Shaler 505）。また、輸送の過程で、稀有な〈速度体験〉によって生じた非日常的な「新しい景色」を観光者（＝ツーリスト）に与えるツーリズムの場に鉄道はなる。世紀転換期、米国の「鉄道」は、「[I]t permits him to make the transit with great expedition.」、と「探検」、「速度」の二重の意味を暗示する expedition に相通じる「交通手段」とされた（Bierce 192）。これは米国の発展の歴史における鉄道の特異性と密接に交わる。「無人の曠野であったところが、鉄道によって開拓され」た、「曠野を文明化して経済的に利用するために開拓するには、まず何よりも効果的な輸送機関が必要」とされた、という両面で、曠野の開拓・文明化、それを推進する（被）支配の力学、付随する米国のアイデンティティの確立、そしてツーリズムの流行、は根を同じくする（シヴェルブシュ 77, 114-15）。

確かに、ツーリストは日常の生活空間から離れた（海浜リゾート等を含む）旅先で、〈観光対象〉に接する。両者は見（られ）る関係にある。視覚がツーリズム体験の中心をなす。ツーリストは、「観光のまなざし」越しに「対象の視覚的知識を手」にする。「異国趣味」の文脈で「まなざしの対象」は「飼い馴ら」される。「権力＝知」を巡る上下の関係がツーリストによって主体的に再生産され、再把握される。社会的不均衡を孕んだ「非対称的な権力関係」が生じる（アーリ&ラースン 2-4, 7-8, 40, 72, 240, 241, 264）。このまなざし（視線）に米国の鉄道は「探検」と「速度」の両面から深く関与した。

同じ19世紀末、欧米の社会文化的位相は「円環狂い」、あるいは「円環の瀾漫」に搦め取られていた。鉄道に加えて、自転車や観覧車等の「（車）輪」による回転が大衆を未知の「視覚体験」へ誘い、彼らの欲望を満たした。小論では、これらの議論を踏まえ、「自転車」や「鉄道」の車輪、それ自体1つの輪である「観覧車」、の回転運動が円環の軌跡を象る過程で〈円

環・回転・反復)の力学が Crane 作品中で展開(転回)される様相を考察する(高山『テクスト世紀末』262-65;『目の中の劇場』352)。合わせて、ツーリズム(リスト)の権勢と「観光のまなざし」、内包される(被)支配の構造論が、19世紀末の米国(の代表としてのニューヨーク市)において、(自転車・鉄道・車輪が象徴する)円環を通じた諸体験の集積と緊密な関係にあると見る。Crane 作品を分析して、この仮定の正しさを立証する²⁾。

1. 19世紀末の米国社会における円環とツーリズム

円環と絡めて、自転車の考察から始める。1896年の新聞記事中で、“All mankind is a-wheel apparently [...]”と Crane はニューヨーク市中の自転車ブームに言及する(W 8: 370)。a-wheel を用いて「万人」が「自転車に乗」る様子を報じる。特に補足も無しに自転車が wheel と同等視される。作家を含め、当時の人々の意識下で自転車が「円環・(車)輪」(wheel)の典型になっていたことが暗示される。

1880年代後半、自転車乗りが米国社会に登場する。1890年代までには、米国で自転車が爆発的に流行する(Green 228)。1895年、ニューヨーク市中で(英国の自転車博覧会を模した)全米自転車博覧会が開催され、多数の来場者で賑わう。また、中産階級米国人向けの1890年の自転車専門雑誌はパリの自転車乗りを特集する。「パリの自転車飛ばし屋」(Parisian scorcher)が「何か特別なもの」(something quite special)として読者の注目を集める(Friss 30, 196-97; “The Parisian Scorcher” 91)。米国における自転車の流行を、その先達である欧州、特に英仏が支えていたことが示唆される。自転車博覧会に通い詰め、自転車専門雑誌を愛読する米国人(自転車乗り)が、欧州を意識しつつ、他人と〈違う〉優越感を渴望していたことは容易に想像される。1890年代の米国で、高額な乗り物である自転車を所有することは富裕の証になった(Green 229)。乗車時の「高い」目線から周囲を「見くだす」行為は自転車乗りの優越感をくすぐる(佐野 128)。この時代、「自転車クラブ」が次々に結成される。クラブの規則や会費条件等によって、「人種」、「性」、「財力」に応じて線引きされ、「不適切」な人間は排除される。クラブの排他的な活動を通して「運営力や動員力」が周囲に「誇示」される。クラブ員同士が集まり、「立派」な自転車乗りであると対外的に示す。各クラブへの所属は、中産階級米国人自転車乗りが自らの階級意識を強化し、優位を保つ手段とされた(Friss 51; 坂元 60, 62, 63)。

一方で、19世紀末に欧州から米国に大量に流入した移民の間でも自転車は流行する(Friss 56-57)。加えて、1890年代には、アフリカ系米国人自転車乗りが米国内で急増する。自転車による事故件数が増大する。アフリカ系米国人加害者、対、「非」アフリカ系米国人(=中産階級米国人)被害者、とする図式が人種的偏見と相まって米国社会に広がる。1895年、Puck

誌に掲載された風刺画「自転車問題」は、アフリカ系米国人自転車乗りが往来を自転車で走る様子を描く。同じ往来を、白人の老若男女が自転車で行き交う。白人自転車乗りが白人男性を自転車で轢く場面が盛り込まれる。「なおも自転車ブームは人々の心を捉え続ける」という説明文が添えられる。これが〈自転車が引き起こす問題〉と銘打たれ、中産階級米国人読者に呈示される（“The Bicycle Problem”；Friss 60-61）。自転車事故の加害者側と目されるアフリカ系米国人と白人が同列に置かれる。白人自転車乗りが白人男性を轢く。自転車問題における白人加害者、すなわち、アフリカ系米国人と同列視されつつ中産階級米国人から疎まれる〈よそ者〉としての（欧州系の）移民、の影が仄めかされる。合わせて、「白人」の範疇に括られ、彼らが中産階級米国人に紛れている可能性、それに起因する〈混乱状態〉、が自転車の別の「問題」として例示されてもいる。

1896年の新聞記事中で、“We are about to enter an age of bloomers [...]”、と Crane は指摘する（W 8：373）。先述の風刺画に描き込まれる「女性」自転車乗りに対する当時の米国の関心の高さが窺える。実際、ニューヨーク市に本拠を構える出版社が1890年に刊行した自転車専門書籍は、“[T]he most experienced and skilful lady rider should never allow herself to relinquish her watch over her mount when going downhill.”、と「女性自転車乗り」に言及する（Griffin 91）。更に、この書籍は表題で“With a Chapter for Ladies”、と断り「女性」自転車乗りを対象とした内容を扱っていることを（自転車乗りを多数含む）読者に強調する。lady で表される「女性」自転車乗りを対象に、“Many an accident has been avoided by a little knowledge and forethought of this kind.”、と「多種多様な事故を避け」る方法が指南される（Griffin 97）。Crane の同時代人、米国のジャーナリスト Ambrose Bierce は、「女性」自転車乗りが「事故」をして「バラバラ」になる惨事、それに基づく女性が自転車を乗り回すことに異を唱える識者の見解、を紹介する（215-16）。以上を突き合わせると、女性自転車乗りに対する関心は頻発する自転車事故と密接な関係にあったと推定される。

これらの事故に近接する「犯罪」の被害者になる危険に女性自転車乗りは晒されてもいた。1897年、英国系の新聞が女性自転車乗りを被害者とする事件を挿絵入りで特集する。「女性自転車乗り」(a lady cyclist) が「獣のように野蛮」(brutal) な白人の暴漢に襲われる傷害事件が倒れた自転車と合わせて描かれる。「自転車を漕ぐ行為 (= 回転運動) (wheeling) が妨害される。女性自転車乗りに付けられた不定冠詞 a は、避け難い事故のように無作為に犠牲者が選ばれること、多数の女性自転車乗りがこの手の犯罪の被害に遭っていたこと、を暗示する (“Atrocious Assault on a Lady Cyclist”)。同新聞は別の記事中で、複数の白人男性が自転車で移動しながら民家に押し入り女性を襲って金品を奪う事件を報じる。無冠詞複数形の「自転車乗り」(cyclists) 全般が「強盗犯」に転じる可能性が暗示される (“Daring Robbery and Atrocious Cruelty by Cyclists”)。いずれの記事も、英国の自転車事情に無関心でなかった筈の、(女性)

自転車乗りを含む中産階級米国人の不安を煽ったこと、同類の犯罪事例が19世紀末の米国に蔓延していた可能性、を示唆する。Craneをも巻き込んで進行する米国の自転車事情の中で、殊更に、事件の加害者となり得る危険な移民、外見的に〈同じ〉白人同士で彼我の区別の付け難い(不可視の)彼らの中産階級米国人が警戒し、その脅威を排除(可視化)しようと試みたとしても不思議ではない。

関連して、米国の経済学者は1890年の著作で、米国内に入って来る「移民」を文明化されていない人々、米国人に「溶け込ん」で米国の文明を内部から貶める存在、と見る。移民は文明の低い「野蛮」な人々とされ、加えて、移民を受け入れた結果、「無政府主義」を信奉する「外国人」による「犯罪事案」が米国内で頻発している、と指摘する(Mayo-Smith 11, 88-89, 133)。1892年の*North American Review* 誌の記事は、(自転車文化の先達である英仏を含む)欧州で頻発する重大な鉄道事故に因み、1891年を「鉄道事故の年」と見て、中産階級米国人読者に冒頭で「鉄道事故と欧州」の関係性を強調する。また、米国の鉄道事故についても言及しつつ、一方で、鉄道事故のメカニズムの一例として「車輪の破損」(broken wheel)による「脱線」(derailment)を挙げる(Prout 196, 201)。1880年代以降、鉄道施設の爆破事件が英国で相次いで発生し、事件への無政府主義者の関与が疑われた(富山 159-60)。爆発物、車輪の破損、脱線事故、へ至るイメージ連鎖は「無政府主義者」、「野蛮な手口」、「移民」、「犯罪」、を英米文化圏において繋げる等号と米国の鉄道事情と相まって、〈円環の崩壊〉を象徴的に導く。欧州人と同様、鉄道を利用して米国中を回るツーリストに等しい中産階級米国人にとって、これは遠い欧州の他人事ではなく直接の恐怖の的となった筈である。事実、1893年の*North American Review* 誌はこの恐怖を抑圧するかのように、“Safest, Fastest, Finest Trains in America”、と謳い米国の鉄道の「安全性」を第一に掲げる広告を掲載する(Safest, Fastest, Finest Trains in America 49)。

移民と円環を取り巻くこの社会文化状況の中、中産階級米国人にとっての祭典、シカゴ万国博覧会が1893年に米国で開催される。この万博には、〈外様〉である移民の脅威を排除する仕掛けが入念に施されていると推察される(越智 iii-iv; 吉見 194)。1892年の*North American Review* 誌の記事によると、この万博(別名「コロンブス博覧会」)は、賞賛に値する「勇敢な水夫」、Christopher Columbusによる〈アメリカ大陸発見〉400周年を記念すること、米国の文明の礎を築いた植民地人(=19世紀末を生きる中産階級米国人の父祖)を、「新世界」の〈アメリカ〉の起源という文脈でColumbusと接合させて、米国の進歩発展・文明の到達度を内外へ誇示すること、を企図する(Davis 305, 306, 308)。1893年出版の万博公式ガイド本は、“It is held that the idea of celebrating the four hundredth anniversary of the landing of Christopher Columbus in a fitting manner, by the holding of a great universal fair in the United States, originated at the Centennial Exposition of 1876.”、と記す(Flinn 27)。1876年に米国で開催された建国100周

年記念博覧会と並列させられ、米国建国の父祖と Columbus が同等視される。ガイド本の権威の下、この等式が（中産階級米国人）来場者に刷り込まれる。

また、「米国展示」部門における「機関車」展示に関して、ガイド本は “A number of locomotives are shown with their wheels in motion driven by compressed air which is brought in pipes under ground from Machinery hall.” と「車輪」、その管理された回転運動を強調する。「(米国が誇る国産の豪華客車) プルマン車両展示」と連記される「米国の乗り物展示」部門の内に「自転車展示」が置かれる (Flinn 113-14)。万博は自国の優位を喧伝する「世界観光の一種のミニ版」とされる (アーリ&ラースン 207)。とすれば、中産階級米国人はガイド本に沿って展示をツーリスト的な目線で眺め、自国の優位性を確認し自らの階級意識を再強化することになる。この文脈で、「車輪」を介して、機関車、プルマン車両、自転車は相互に接続する。鉄道と自転車が結び付く。両者を繋ぎ合わせる当時の言説を掘り起こして議論を補強する。1892年の *Atlantic Monthly* 誌の記事は、“In its social importance the bicycle deserves to rank next to the railway [. . .].” と「自転車」と「鉄道」の近接性を中産階級米国人読者と共有する (Shaler 506)。1900年の自転車のペダルの広告は、“Ramsey Swinging Pedals ARE THE PULL-MAN CARS OF CYCLING” と「自転車」と「プルマン車両」の比喩的な結合を呈示する (Ramsey Swinging Pedals)。19世紀末の米国、純国産自転車である「コロンビア自転車」が商業的に大成功していた (アンブローズ 48-49)。(万博の掲げる〈Columbus を米国に直結〉させるイメージ連関を命名において先取りする) この自転車と比べて、万博会場内の諸々の自転車展示越しに中産階級米国人の自尊心が再確認されたことは想像に難くない。万博開催の年、同自転車の広告は “Always, now, and probably forever, the STANDARD BICYCLE of the world.” と「世界基準・規範」として「コロンビア (=コロンブス)」を謳う (That You May Know 42)。万博における自転車と鉄道の結合は、自転車、鉄道、車輪、それらが象る円環の内部に万博自体を〈米国的なもの = 世界基準・規範〉にすり替えて囲い込む。移民の脅威から米国の文明を、移民を加害者とする事件 (事故) から中産階級米国人の身体を、象徴的に保護する役割を担ったと言える。

この円環イメージを Crane 作品はどのように利用したか。万博会場内にそびえ立つ巨大な円形の乗り物、「フェリス観覧車」に手掛かりを求める。“Ferris Wheel.—Carrying the passenger 250 feet in the air; 50 cents for two revolutions.” と「(車) 輪」、付随する「回転運動」を通して時代の円環を観覧車が象徴していたことをガイド本は伝える (Flinn 23)。1893年、この観覧車の特集した記事が、製造業に従事する、教養があり、当時花形の (自転車や鉄道車両等の) 工業製品に関心を寄せる中産階級米国人を対象にした実用雑誌 *Manufacturer and Builder* に掲載される。万博で「最も興味深く人気のある乗り物」、人気に比例して「高い売上を誇る」、乗車すると一種の「旅」体験が得られる、と観覧車は説明される (“The Ferris Wheel at

the World's Fair” 170; “The Ferris Wheel Profitable” 225)。非日常的な「新しい景色」が提供される、乗客はツーリストに転じられる（アーリ&ラースン7）。万博閉会後にニューヨーク市中へ観覧車は移設されることになっていた。ところが、諸事情により計画は中止になる（Anderson 75; “The Ferris Wheel” 157）。この頓挫は逆説的に、（観覧車のシカゴからの到着を待つ）ニューヨーク市中の中産階級米国人の間で、wheel の残像とともに、ニューヨーク市とシカゴ万博を「視覚」の位相でより接合させたと推測される。これを踏まえて、Crane が意図する読者、彼らに対する作家の意識、を検討する。

万博が開催された 1893 年、Crane は「住人の国籍で地図を塗り分けると、シマウマの毛並よりも多くの縞、虹よりも多くの色になる」と形容される、移民で溢れたニューヨーク市中のスラム、「パワー街のあらゆる国籍からなる集団」（[the] nationalities of the Bowery）に属する、娼婦 Maggie の転落人生を描く中編 *Maggie: A Girl of the Streets*（以後 MGS と表記）を自費出版する（Riis, *How the Other Half Lives* 20; W 1:30）。私家版 MGS に添えた献呈文で、excellent people を読者に想定する、と作家は述べる（Wertheim and Sorrentino, *Correspondence* 53）。MGS 執筆に際して作家は同時代の米国の写真ジャーナリスト Jacob Riis の影響を受ける（Benfey 63; Gullason 499-500）³⁾。Riis は 1904 年の著作で、中産階級米国人がスラムの諸問題を外から「読む（見る）」構図を採用する（Riis, *Children of the Tenements* 78）。とすれば、Crane の想定する読者もまた、Riis が描く中産階級米国人に準じる筈である。1893 年の献呈文、及び 1896 年の手紙中で、MGS は「見せる」（show）意図を有する、と作家は明かす（Wertheim and Sorrentino, *Correspondence* 53, 671）。また、1894 年、ニューヨーク市を拠点とする McClure 社によって新聞各社に配信された記事の初稿で、“[The Hungarians, Polacs and Italians] looked like assassins and on the surface they looked like thieves.”、と looked like の反復使用が仄めかす「視覚」情報に基づき、当時「好ましくない」とされた移民を外見で可視化し特定化しようと作家は努める（Mayo-Smith 133; W 8: 606）。ニューヨーク市中の移民の（不）可視性に紛れもなく作家は関心を示す。wheel を巡る熱狂の渦中、目新しい視覚体験を求めて、観覧車、自転車、鉄道車両に興じ、「観光のまなざし」越しに見下ろす視線で他者を眺める中産階級米国人（ツーリスト）と歩を合わせる。彼らを読者とみなし、合わせて彼らの需要を明確に意識しつつ万博が象る円環を作品に取り込んで行ったと言える。

2. Crane 作品に見る円環表象

私家版から 3 年後、1896 年に改訂出版される MGS は表層の物語の傍らで、スラムの風景を読者に「見せ」ながら、「(車) 輪」のイメージを、wheel(s) を用いて喚起する。“Above the muffled roar of conversation, the dismal wailings of babies at night, the thumping of feet in unseen

corridors and rooms, and the sound of varied hoarse shoutings in the street and the rattling of wheels over cobbles, they heard the screams of the child and the roars of the mother die away to a feeble moaning and a subdued bass muttering.”、とスラム描写に様々な「（車）輪」の音が割り込む。“When an engine struck a mass of blocked trucks, splitting it into fragments, as a blow annihilates a cake of ice, Jimmie’s team could usually be observed high and safe, with whole wheels, on the sidewalk.”、と馬車の「（車）輪」を接写する（W 1: 16, 23）。

また、「（車）輪」が暗示する「回転運動」と関連付けて wheel が用いられる。“Once at the Menagerie he went into a trance of admiration before the spectacle of a very small monkey threatening to thrash a cageful because one of them had pulled his tail and he had not wheeled about quickly enough to discover who did it.”、と動物園の檻の中を猿が「ぐるぐる回転」する。“The little boys whooped in glee. As she started up the street they fell in behind and marched uproariously. Occasionally she wheeled about and made charges on them.”、と女性は「方向転換」して悪童たちに突進する。“‘Dere she stands,’ she cried, wheeling suddenly and pointing with dramatic finger.”、と身体を「回転させ」ながら母親は娘を指さす。“He wheeled about hastily and turned his stare into the air, like a sailor with a search-light.”、と若者は身体の「向きを変え」て違う方角を見る（W 1: 35, 38, 64, 69）。私家版 MGS が出た 1893 年、米国の自転車メーカーは「車輪」にライオンの頭部の図像を重ね合わせる広告を打ち出す。自転車は wheel に特化され視覚的に円環で表される（Monarch Bicycles）。同様に、MGS は wheel(s) の連続使用を通して、想定される読者に円環と自転車を間接的に結び付けて見せる。

風刺画「自転車問題」が雑誌掲載された翌 1896 年、McClure 社は Crane による記事“New York’s Bicycle Speedway”（以後 NYBS と表記）を新聞各社に配信する。NYBS は「自転車」を直接の題材にする。同時代の自転車事情を取材し、「自転車飛ばし屋」（scorcher）たちが行き交う往来を「自転車レース場」（bicycle speedway）に喩える（W 8: 370, 372）。ニューヨーク市の風物、「自転車」と「自転車乗り」にまつわる「ありふれた光景を描いた滑稽なスケッチ」、「広告や消費文化の変革に着眼した」作品、と従来位置付けられてきた（Brown 7; Robertson 107）。他方、作中の自転車表象を掘り下げる考察は皆無である。Crane 作品中「自転車」が表題に唯一冠される。また、speedway は、「速さ・速度」のイメージを自転車に付与する。「ニューヨークの」（New York’s）、と作品の舞台が強調される。これらの事象を表題から拾い上げつつ、作中に織り込まれた円環の果たす役割を詳らかにする。

作品冒頭部で、“The Bowery has had its day as a famous New York street. It is now a mere tradition.”、とニューヨーク市中の「パワー街」が「今では（肯定的な意味で）有名」であり、「（それほど重要ではない）伝統」を形成している、と表明される（W 8: 370）。時系列上、NYBS 執筆直前にパワー街を舞台とする MGS が改訂出版される（Wertheim and Sorrentino,

Log 122)。また、NYBS は、昔日を回顧しながら、規律違反の自転車乗りを取り締まる警官を、“[T]he majority of the policemen [...] could swear most graphically in from two to five languages.”、と述懐する。「2 から 5 か国語で」なされる「罵り」は、複数言語が交錯する時代背景、自転車乗りに潜む移民の影、を暗示する。この箇所は過去の逸話として語られる。しかし、“There is a new game on the Boulevard. It is the game of Bicycle Cop and Scorcher.”、“Bicycle Cop and Scorcher is a good game, but after all it is not as good as the game that was played in the old days [...]”、と新旧の二項対立と連動させ過去と現在を強意的に対比する表記は、自転車（乗り）を巡る「過去」の出来事の蓄積が「現在」のニューヨーク市中の自転車事情を形成していることを十分予期させる（W 8: 372）。

作中で反復される過去への言及は却って、作者と読者（現在の自転車乗りを含む）の双方が自転車乗りの行き交うニューヨーク市中の光景に、移民との混交不安を感じていたことを窺わせる。冒頭部のパワリー街の記述は裏で、同地区と不可分の移民に対する中産階級米国人の不安交じりの関心に呼应しつつ、不安の部分を巧みに隠蔽したとも見て取れる。事実、NYBS が配信された同年、中産階級米国人向けの雑誌が組んだ移民特集記事で、“[T]he present situation is most menacing to our peace and political safety. In all the social and industrial disorders of this country since 1877, the foreign elements have proved themselves the ready tools of demagogues in defying the law, in destroying property, and in working violence.”、と「現在」の移民を取り巻く米国の情勢が示される（Walker 828-29）。「米国の平和と政治上の安全」に対して「脅威を与え」かねない、「法を無視」し「社会・個人双方の次元で米国の無秩序状態」を招く犯罪者に等しい、という理由で移民の制限が肯定される。

現在と過去双方に目を向けて彼此のニューヨーク市中の「自転車乗り」たちを説明する際に、NYBS は「コロンブス記念碑」(Columbus monument) を中心に置く（W 8: 370, 372）。時を越え、自転車乗りにタグ付けて Columbus が焦点化されることは無視できない。1906 年のニューヨーク市案内本はこの記念碑に言及する。Columbus による「アメリカ大陸発見」400 周年を記念して 1892 年にニューヨーク市に寄贈された、と来歴が語られる。また、その一帯は「コロンブス広場」(Columbus Circle) と呼ばれる。Columbus を取り囲む a great circle (大きな広場=大円) と表され、円環性が強調される。広場（を散策する人々）を眼下に睥睨する Columbus の視線は、記念碑を仰ぎ見る（案内本の読者に連なる人々の）視線と挿絵を通して対称形を描く（Wilson 57）。案内本から遡る 10 年前、NYBS が取り上げる 1896 年当時の記念碑の実態がその不変の本質とともに浮かび上がる。合わせて、設置後 10 年以上経ってなお案内本が丁寧に「挿絵付き」で紹介している事実から推して、影響力の高さが案内本と表裏一体のツーリズム（リスト）の文脈から改めて窺い知れる。

“Down at the Circle where stands the patient Columbus, the stores are crowded with bicycle goods.

[. . .] The great discoverer, erect on his tall grey shaft, must feel his stone head whirl when the battalions come swinging and shining around the curve.”、と NYBS は記念碑周辺を描写する (W 8: 371)。案内本の挿絵を直に文章化した感のある Columbus の素描と一緒に、軒を連ねる「商品の充実」した「自転車屋」が前景化される。自転車（屋）と並置されて、Columbus は当時の米国が誇る国産のコロンビア自転車を想起させる。Columbus は patient と形容され、「忍耐強さ」を有する。これは Columbus を讃える万博開催の年に、雑誌上で謳われるコロンビア自転車の「頑丈さ」(rigidity) に還元させられ得る (That You May Know 42)。また、Columbus は「偉大な発見者」([t]he great discoverer) と言い換えられる。通りに面して立ち並ぶ「ホテル」を “The cafes and dining rooms of the apartment hotels are occupied mainly by people in bicycle clothes.”、と「自転車乗り」たちが占める (W 8: 371)。(Columbus に重なるコロンビア自転車の所有者を含む) 自転車乗りたち、及び彼らの駆る自転車は、“A mighty army of wheels streams from the brick wilderness below Central Park and speeds over the asphalt. In the cool of the evening it returns with swaying and flashing of myriad of lamps.”、“[T]he bicycle, that machine which has gained an economic position of the most tremendous importance, is going to be responsible for more than the bruises on the departed fat policemen of the Boulevard.”、と活写される (W 8: 370, 373)。米国におけるツーリズム文化の発展と緊密な関係にある「ホテル」の客は自転車乗りとのアナロジーで語られる。自転車乗りは「(車) 輪」と換喩的に表象される。〈自転車(乗り) = 車輪 = 鉄道 = ツーリズム〉と繋げる等号の枠内で、「出発・帰還」という環状運動をくり返す。ツーリストとして安全に回収される。「権勢」を示唆する形容詞 mighty は、「経済上の立場」を映す、自転車を富裕の証明とする認識と合わせて、移民の排除、自転車乗り(ツーリスト)の階級的優位、を強化する⁴⁾。動詞 speed が含意する、自転車乗りが直接的に体験する「速度」は表題中の speedway と連動して、彼ら (= ツーリスト) に新奇な視覚体験を、Columbus がしたのと同じように〈発見〉させる。

作品は、パワリー街に対する補遺的な説明で始まり、多言語が飛び交う移民空間に言及し、自転車の「未来の在りよう」に触れて終わる。「現在」のニューヨーク市中の自転車事情のみならず、過去 - 現在 - 未来に関わる「自転車」の包括性に力点が置かれる。自転車乗りは Columbus をその中心に据えた広場 (= 円) の周上を比喩的に巡る。彼らの「法の枠からはみ出た」(beyond the patience of the law) 一見すると無秩序な様相は、記念碑上で「直立」した Columbus が発現する、見下ろす視線の優位性と一体化する (W 8: 372)。〈アメリカ大陸発見〉と米国の創生が英雄 Columbus を通じて繋がる。万博の発信するこの言説を引きずりながら、「観光のまなざし」の下、移民は他者化され、脅威は封じられる。自転車乗りは再秩序化され中産階級米国人読者に安全に同化する。

NYBS は、万博開催と同年に発表された私家版と連続する改訂版 MGS と内容面で関連性を

保持しつつ、Columbus への反復的な言及を通して万博へ原点「回帰」する、と捉えることができる。スラム散策者が「英国人紳士」(English gentlemen)と表されて MGS に登場する。改訂版では、「英国人観光客」(English tourists)に書き換えられる(W 1: 84)。この改変は、「紳士」と「観光客」を結び付ける等号から導かれる、(紳士としての)観光客の優越感に伍する作家の意識を窺わせる。この延長上に位置する、Columbus と記念碑が内包する視線の優位性、を作家もまた了解していたのである。

3. “The Bride Comes to Yellow Sky” における閉じた円環の構図

シカゴ万博の開催と私家版 MGS の発表を目撃した 1893 年の米国において、コロンビア自転車の広告は並走する身だしなみの整った紳士・淑女の自転車乗りを画像化する(That You May Know 42)。2 台の自転車によって創出される左右二対の wheel(s) の軌跡が、鉄道車両、特に、当時の中産階級米国人観光客にとって花形の客車、プルマン車両(の基本的枠組み)のイメージを惹起したと見ても外的外れではあるまい。1898 年、中編“The Bride Comes to Yellow Sky”(以後 BCYS と表記)において、西部テキサス州の町イエロー・スカイの保安官 Jack Potter とならず者 Scratchy Wilson の間の諍いを Crane は取り上げる。円環とは一見無縁な本作品を、19 世紀末の米国に流布する円環イメージ、自転車と鉄道の近接性、に基づき NYBS と同列に置くことの妥当性、その向こうに透ける作家の戦略を探る。

BCYS の考察に入る前に、議論の補助線として、作家による鉄道体験、それに基づく鉄道への意識の実相を詳らかにする。この目的のために、鉄道への言及を Crane 作品中からいくつか拾い上げる。まずは、MGS に織り込まれた鉄道描写を概観する。作品は「高架鉄道」が近隣を通過する際に揺れる窓を描写する。帰宅途中の人々は「列車」に間に合うよう往來を急ぐ。地面から赤子を拾い上げる女性を、迫る「急行列車」から人命を救う女傑に喩える(W 1: 34, 62, 64)。作品は「鉄道」に読者の注意を向ける。MGS の改定版が刊行された翌年、BCYS を執筆する傍らで、作家は鉄道で英国を旅する。この体験が 1899 年、紀行文“Scotch Express”(以後 SE と表記)として雑誌掲載される(Wertheim and Sorrentino, *Log* 274, 277-78; W 8: 961)。紀行文の表題と MGS に見られる比喩に共通する「急行」(express)列車に着眼して、作家の鉄道への意識を紀行文から更に辿る。

客車を牽引する機関車が立てる音は「吠える」(roar)と形容される。鉄道旅行は、「急行」列車に特有の移動速度の〈速さ〉とともに、“It had started from the home of one accent to the home of another accent. It was going from manner to manner, from habit to habit [...]”、と another が含意する非日常の〈異国〉への空間的移動に等しいことが再確認される。“[T]he wheels spun on the rails [...]”、と列車が動き出す際、「レール」上を回転する「車輪」が焦

点化される。“The Americans [...] are the railway peoples.”、と米国人と鉄道の関係について述べられる。米国のプルマン車両と（作家がこの旅行中に乗車した）英国の客車の違いが、“The rather elaborate menu and service of the Pullman dining-car is not known in England or on the Continent.”、と記される。また、車窓の風景が、“A long prison-like row of tenements, not at all resembling London but in one way resembling New York, appeared to the left and then sank out of sight like a phantom.”、と表現される（W 8: 741, 742, 743, 749, 751）。英国での鉄道旅行を通して、作家は（紀行文の読者と想定される）中産階級米国人が鉄道と欧州に寄せる関心を指摘する。彼らの一員として、（米国最頂の）ツーリストの優越な立場に自分の身を置きプルマン車両の優位性を誇る。鉄道の「車輪とレール」の関係に気を配る。珍しい獣のように「吠える」機関車に牽引され、醸し出される異国情緒とともに別世界に赴くツーリズム体験を得る。車窓は「ニューヨーク市中のスラム」に酷似した風景をもたらすものの、動詞 *sank* が仄めかす「沈む」動作の中で下位化され、乗客（ツーリスト）が優越感に浸りつつ覗き込むことを可能にする。

また、BCYS と同時進行で、火事で負傷した使用人の処遇を巡る医師一家の苦悩を描く中編 “The Monster”（以下 MT と表記）を作家は執筆する。“Little Jim was, for the time, engine Number 36, and he was making the run between Syracuse and Rochester. He was fourteen minutes behind time, and the throttle was wide open. In consequence, when he swung around the curve at the flower-bed, a wheel of his cart destroyed a peony. [...] The doctor had his back to this accident, and he continued to pace slowly to and fro, pushing the mower.”、と庭で遊ぶ少年 Jim の描写で MT は始まる（W 7: 9-10）。「第36号機関車」になりきり「鉄道ごっこ」に興じる最中、花壇の花を彼は誤って折る。この「(鉄道) 事故」の直接の原因は彼が「(運行の遅れを取り戻すために) 急いだ」ことに求められる。〈ごっこ〉遊びであっても、類似の鉄道遅延、伴う諸々の事故、場合によれば彼が引き起こす（架空の）レールから「車輪」が逸れた「脱線」による損害事案、が米国で依然として頻発していたと推察される。また、端役ではあるものの、「機関車」に喩えられる中年女性、元「鉄道のプレーキ係」、現職「鉄道技師」が物語の節目に順次登場する（W 7: 26, 40, 51）。鉄道イメージが継続して喚起される。表層の物語進行の裏で、鉄道（事故）に対する当時の米国社会の不安交じりの関心を MT は映し出す。BCYS が完成して3ヶ月、同じく西部を舞台にする中編 “The Blue Hotel”（以後 BH と表記）の執筆が開始される（Wertheim and Sorrentino, *Log* 274, 282）。BH は冒頭で、“[T]he great trans-continental expresses, long lines of swaying Pullmans, swept through Fort Romper [...]”、“With this opulence and splendor, these creeds, classes, egotisms, that streamed through Romper on the rails day after day, they had no color in common.”、と田舎町フォート・ロンパーを通過するプルマン車両を連結した「急行列車（の乗客）」が備える「階級的な優越」を「偉大」や「豪勢かつ壮麗」という表

現で具体化する。また、“[T]here’s a new railroad goin’ to be built down from Broken Arm to here. Not to mention the four churches and the smashin’ big brick school-house.”、と鉄道について語られる (W 5: 142, 150)。「鉄道の新規」敷設と「学校」建設が結び付く。米国の鉄道が期待されてきた〈曠野の文明化 (= 学校建設)〉の構図がツーリズムの発展と絡めて再確認される (シヴェルブシュ 114-15)。これらは、SE に垣間見られる鉄道意識に基づく作家と読者の間の共通認識を反映している。以上を踏まえて、BCYS の考察に入る。

BCYS は伝統的に、西部の「小さな町の安全と退屈が破綻に瀕する脆弱性の恐怖」を描く、「認識の齟齬」を主題とする「パロディとリアリズムの混合」した物語、と評されてきた (Cady 159; Solomon 252; Wolford 34)。結末部、保安官とならず者が白昼に銃で決闘する場面は〈西部〉物語的な〈見せ場〉として期待される (W 5: 120)。しかし、両者の認識の食い違いのせいで結局、決闘は完遂されず中途半端に終わる。この結末部を巡って議論は尽きない。例えば、米国東部的な価値観が西部に浸潤した結果の表れ、と見る考察がある (Holton 227)。従来の BCYS 研究では、「東部と西部の価値観の対比」を核にして物語展開が意味付けられてきた。冒頭の一文で、“The great Pullman was whirling onward with such dignity of motion that a glance from the window seemed simply to prove that the plains of Texas were pouring eastward.”、と綴られ、途中、“The California Express on the Southern Railway was due at Yellow Sky in twenty-one minutes.”、と補足される (W 5: 109, 113)。「プルマン急行列車」に特化して物語は進む。「東に向かって」流れる窓外の光景、「カリフォルニアに向かう急行列車」という表現から、列車がレール上を東から西へ移動していることが分かる。小論では、東部的価値観と分断された異質な「西部的」価値観として両者を〈対比〉しない。その代わりに、交通機関(鉄道)による東部 - 西部の〈接続〉から派生する円環 - 鉄道 - ツーリズムの連続性、と絡めて 19 世紀末の米国社会において BCYS が果たした役割を捉え直す⁵⁾。

「花嫁」を連れて Potter が帰郷する場面で物語は幕を開ける。彼は冒頭の一文中で言及される「豪勢」(great) かつ「威厳」(dignity) を備えたプルマン車両、の乗客(ツーリスト)である。「新調」(new) した衣服に身を包み、「旅行」(trip, travel) 中の「名士」(a prominent person) と彼は紹介される。車中、鉄道路線の「総延長距離」や列車の「停車回数」を彼は新妻に教える。ツーリスト向けのガイド本と彼の身振りは共振する。また、続けて、“He had the pride of an owner.”、とプルマン車両の「所有者」然として振る舞う。自らの結婚を事前に知らせていないので、比喩的に「新築ホテルの火事」と同等の衝撃が町中に広がるに違いない、と彼は夢想する (W 5: 109, 110, 111, 112)。彼は「名士」としての自己像を「プルマン車両」が与える優越感に同化させる。ホテルや鉄道に対する関心の彼方にツーリストの属性が強調される。観光のまなざしの主体、優位なツーリスト、として描かれる。

Potter 不在時のイエロー・スカイの風景と Wilson は、偶然居合わせた別のツーリスト、匿

名の「旅商人」による〈目撃〉談として語られる。職業柄「旅行」と密接に関係する、この旅商人を詳しく見ていく。彼は酒場 the Weary Gentleman saloon の客である。この設定と酒場の名前が象徴するように、彼は「紳士」の属性を帯びる。彼の「上品な身のこなし」を暗示する副詞 *gracefully* を通して、それは強化される。加えて、「(当時のツーリストたちが殺到した) 英気を養うためのリゾート」(health resort)、「新天地」(a new field) を訪れた「新来の客」(new-comer)、「よそ者」(stranger, foreigner)、と彼は表現される。対して、Wilson は、その人気故に高い「利益」を生み出す「観覧車」に匹敵する「よそ者にとっての興味(利益)の対象」(the interest of a foreigner) に等しい (“The Ferris Wheel Profitable” 225; W 5: 113, 114, 115)。酒場の名前の内の *weary* が含意する「倦怠」、〈新奇〉性を求める需要、に応じる物語展開の一環として、Wilson の反社会的な振る舞いは理解され得る⁶⁾。西部における〈よそ者〉ツーリスト、匿名性と相まって東部の読者の視点と一致する、旅商人の目 (= 観光のまなざし) 越しに読者に対して Potter と Wilson の対立構造が示される。

両者の関係は、町の住人による発話、“Oh, he’s the town marshal. He goes out and fights Scratchy when he gets on one of these tears.” によって旅商人に知らされる。善悪二元論構造(保安官、対、敵対者)の中で、その犯罪性が際立つ一方、“When he’s sober he’s all right—kind of simple—wouldn’t hurt a fly—nicest fellow in town. But when he’s drunk—whoo!”、と「素面」のときは「無害」かつ「町一番の善人」として、Wilson はイエロー・スカイで評価される (W 5: 115, 116)。飲酒して傍若無人に振る舞う彼の様子を勘案するならば、どんな善人でも〈不可視〉の危険性を隠し持つ、とするメッセージをこの評価は裏で伝える。鉄道による東部と西部の接続・連続性を考慮するならば、Crane が想定する読者、東部ニューヨーク市中の中産階級米国人にとって、Wilson はイエロー・スカイの住人と明記されるものの、「法を無視」し「(無政府主義者によって扇動されていると当時まことしやかに信じられた) 各種の重大な犯罪」をも厭わない脅威の対象としての移民、町に潜む危険な隣人とみなされ得たと言える。

では、Wilson が象徴的に担わされる脅威を、その延長に自転車を連ねる円環・鉄道・ツーリズムの連続性を巡る言説の中で、作品はいかにして封じ込めるのか。確かに、Wilson は内奥に悪意を隠し持つ「善人」かもしれないが、彼の二面性は台詞中で副次的に語られるだけである。実際、彼の善性は “Scratchy Wilson’s drunk, and has turned loose with both hands.”、と初出から一貫して欠落している (W 5: 114)。彼は実質、〈見えない脅威〉ではない。法を護持する保安官との対立関係の中に置かれ可視化された犯罪者、悪の属性の代表に他ならない。彼の名前 Scratchy は「獣が爪で引っ搔いて掘る」(scratch) 様子を連想させる。おまけに、彼は「獣的な獰猛さ」(ferocity) を伴う、「(獣類を連想させる) 生き物」(creature) に似る、「猫」(cat) や「蛇」(snake) に喩えられる。また、彼は「遠吠え」(yawls) する、「吠える」(roar,

howl)、「大声で鳴く」(bellow)、「唸り声」(growling)を上げる。総括的に、「野蛮な」(wild)と表されて〈野蛮さ＝獣性〉が強調される(W 5: 116, 117, 118, 119, 120)。加えて、彼の外見描写の初出で、“A man in a maroon-colored flannel shirt, which had been purchased for purposes of decoration and made, principally, by some Jewish women on the east side of New York, rounded a corner and walked into the middle of the main street of Yellow Sky.”と「(当時の移民の居住区域、ニューヨーク市中のスラムの一画をなす) イースト・サイド地区」の「ユダヤ系移民女性」が縫製したシャツを着ていると強調される(Riis, *How the Other Half Lives* 49-50; W 5: 116)。当時の言説の中で、移民は「獣に近い存在」とされた(Walker 823)。Wilsonには獣のイメージが反復的に付いて回る。舞台は西部でも、衣服の出自に関する説明を通して東部の「移民の属性を帯びるシャツ」をまとめて通りを闊歩する。彼は名前を失い「1人の男性」と匿名化される。可視化されたニューヨーク市中の移民の〈代表〉として表象される。

Wilson から挑まれた決闘を Potter が回避しようとする際、“[S]omewhere at the back of his mind a vision of the Pullman floated, the sea-green figured velvet, the shining brass, silver, and glass, the wood that gleamed as darkly brilliant as the surface of a pool of oil—all the glory of the marriage, the environment of the new estate.”と「プルマン車両の内部の映像」が Potter の脳裏に蘇る。このイメージを伴い、乗客(ツーリスト)の優越性が再強化される。その際、new estate に焦点が当てられる。作中、Potter に帯同し、their new estate, the new estate と2回登場する(W 5: 110, 119)。estate は「階級、財産、地所」を意味する。物語展開に従うならば、new estate は Potter 夫妻が結婚によって手に入れた「新しい身分(を示す新調した衣服を含む諸々の事象)」として理解できる。estate は their から the へ、一組の夫婦から一般論に拡大される。Wilson を危険な移民に一致させる等式を前に、移民の脅威を無害なものに〈新たに〉上書きするツーリズムの身振り、それを支える「観光のまなざし」の主体、ツーリストの特権的な「階級性(estate)」、が表層の意味の裏で導かれる(アーリ&ラースン7-8)。これは、Columbus が〈発見〉した新天地(new estate)〈アメリカ〉の中核を担う中産階級米国人(ツーリスト)の自尊心の復権に相通じる。Potter は作中、Wilson に「見慣れない状況」(foreign condition)を与える。「旅商人」と同化し、イエロー・スカイを訪れる(＝ツーリズム)という文脈で「よそ者(foreigner)＝ツーリスト」の属性を帯び、その優越な立場に与する。この流れを通して、Wilson が決闘の中止を宣言する(W 5: 115, 120)。ツーリズム(リスト)を巡る二重の位相で、決闘の顛末を通じて Potter 越しに中産階級米国人の優位性は追体験される。その過程で、Potter 婦人は Wilson によって wife ではなく the lady と呼び表される。lady は同時代の「女性自転車乗り」を指してもいた。とすれば、決闘が撤回され、移民(に類する Wilson) から被り得る「損害」(damage)を lady が免れることは、定冠詞 the が付いて特定化された女性自転車乗りが移民によって引き起こされる事件(事故)を回避する図、へ意味を変

える (Griffin 91; Mayo-Smith 294; W 5: 115, 120)。

立ち去る Wilson の描写、“His feet made funnel-shaped tracks in the heavy sand.”、で作品は終わる (W 5: 120)。彼の足元と地面に視点が向かう。町の名前イエロー・スカイは、そこに含まれる「空 (sky)」のイメージと相まって物語世界に織り込まれた垂直ベクトル構造を暗示する。彼は最終的に見下げられる存在になる。足跡は地面に「(機関車の) 煙突」(funnel) を象る。下位化・無害化されて、煙突を内包する機関車の一部に組み入れられる (W 5: 113)。聴覚に訴える彼の獣的な「咆哮」もまた、プルマン車両を牽引する機関車が立てる音に溶け込む。作品冒頭で、「急行」が表徴する〈速度〉を前景化しつつ、プルマン急行列車は西方へ「高速で疾駆」(whirling) する。この列車は同時に、象徴的に「回転」(whirling) してもいる (W 5: 109)。鉄道が東部と西部を往復し両者を繋ぎ合わせる。この動作に内在する円環運動と彼は同調する。移民は米国社会に脅威を与えかねない。〈不可視〉状態だと余計に始末が悪い。彼らに向かう中産階級米国人の不安感を承知した上で、作品はツーリズム (リスト) の優位性を運ぶ鉄道の線路 (レール) 上から「脱線」(derailment) することなく Wilson を回収し封じ込める。理性の欠落した Wilson は被害者を無作為に選ぶ点で鉄道事故と共通する。その脅威は作中で彼に施される最終的な処遇とともに巧みに隠蔽される。曠野を開拓・文明化する、探検と速度の米国鉄道史の公式に彼は取り込まれる (Bierce 192; シヴェルブシュ 115)。

BCYS は同時代ニューヨーク市中の移民のイメージを取り込み、MGS、NYBS、MT、SE、BH 等の他作品と円環 - 鉄道 - ツーリズムの連続性という文脈を共有する。シカゴ万博の開催と自転車の流行、背後に潜む、(欧州系の) 移民によって体现される諸々の危険性、欧州への関心、と絡み合いつつ、移民を無害化しながら回転運動の力学の中を循環する。この戦略に基づき、BCYS はパロディとリアリズムの単なる混合を越えた物語として再定位され得る。1900年の短編“Moonlight on the Snow”の中で、Wilson と Potter は再登場する。Wilson は文明化され東部的な価値観に従う安全な人物になっている。Potter が彼を部下として適切に管理する。この設定は、BCYS における作家の意図の根幹を補強する。BCYS と連続しつつ、町で評判の善人から、保安官と敵対する悪人、保安官の謹直な部下である善人、と作品を跨いで、Wilson の属性は善と悪の間で円環の軌跡を描く。結局のところ、Wilson は善に帰着する。こうして円環は閉じる。この構図に組み込まれ、ツーリズム (リスト) もまた回転運動を支える動力源となる。〈円環 - 回転 - 反復〉の力学が作用する中、彼らの優越性は担保される。

お わ り に

円環の熱気が引き起こした時代の〈狂気〉は、中産階級米国人と移民の間の (不) 可視を巡るせめぎ合いの中で、いわば、驚喜 - 凶器 - 共起 - 狂喜の振り幅で解体 - 再編し「続け」る。

それは新たな円環を紡ぎ出す原動力となる。Crane もまた、「円環に熱狂する人々」(maniacs)に取り囲まれた 19 世紀末の社会文化状況の影響下にあった (W 8: 512)。小論では、複数の Crane 作品を斬新に組み合わせ、円環を基軸にして、従来の研究の視座では捉え切れない新たな読みによる上書き的な(再)解釈の可能性を考究した。ツーリズム(リスト)に係る諸言説から派生する、中産階級米国人と移民の間の覇権の力学の只中に作家が身を置いていたことは相違ない。

19 世紀末の米国、コロンビア自転車が彼方此方を駆け回る、車輪の回転運動を伴い鉄道は線路(レール)上を間断なく往復する、夥しい数の人々を乗せて観覧車は巡る。世界は比喩的に円環に耽溺する。シカゴ万博が米国史の重大な節目を飾る。その瞬間を観覧車が切り取る。頓挫した移転構想を埋め合わせる象徴的な代替物として、ニューヨーク市の都市の地平に投影される大観覧車の〈円環の姿形〉に「コロンブス広場=大円」は直結する。円周上を自転車が巡行する。回転運動の彼岸に西部の町の風景を配しつつ、作家は両者を相互に眺める。東部メディア寄りのこの視線を踏まえてニューヨーク市中のスラムと移民を焦点化する MGS の物語展開(転回)を NYBS と絡めて読み返すならば、19 世紀末の米国の社会文化的位相の再構築に結実し得る新たな Crane 研究の地平の転回(展開)が大いに期待される。

注

- 1) 小論では、「中産階級米国人」を、米国建国以来の主流派集団と自認する「ワस्प」(WASP=White Anglo-Saxon Protestant)に連なる「白人」中産階級米国人に対して用いる(越智 5)。また、Crane 作品からの引用は、Fredson Bowers 編、ヴァージニア大学出版の『Stephen Crane 全集(全 10 巻)』に拠り、W に続けて巻数と項数を括弧内に記す。なお、以下、引用文中の下線は全て筆者による。
- 2) 1899 年の広告で自転車で搭載する小型カメラが宣伝される。“Tourists and Wheelmen”、と銘打たれ、自転車乗りとツーリストが機械(カメラ)の目を通して〈まなざし〉によって等価視される(Cycle Poco Camera)。また、筆者は 2014 年と 2016 年の論考で、ツーリズム(リスト)を取り巻く 19 世紀末の米国における社会文化政治的背景と Crane 作品の連続性を探っている(天理大学アメリカ学会編 158-75; 増崎 23-40)。小論では、各論考における考察の成果を、wheel(s)を鍵にした円環という観点から補完する。
- 3) Riis の諸作品に埋め込まれたスラムツーリズムの仕掛けと Crane 作品の接続性を、筆者は 2016 年の論考で掘り起こしている(増崎 23-40)。
- 4) 記事と同年、“the greatest Summer resort in America—the vacation abode of the mighty middle classes”、と作家は海浜リゾートの特徴について述べる。その際、「中産階級米国人」リゾート客は「強大な」と形容される(W 8: 655)。mighty を介して、作家が「自転車乗り」を中産階級米国人と同一視していたことが窺える。
- 5) 19 世紀末の米国における「飲酒・禁酒」の言説と関係付けて Crane 作品群を論じる研究がある。作中の「アルコール」表象から西部と東部を繋げる視座が得られる。また、「色彩語」の多用に着目して Crane 作品群を包括的に論じる研究がある。色の持つイメージから作品間の新たな繋がりが発見される。その作業の過程で BCYS の再読の可能性が示唆される(Monteiro 68-69, 169; 押谷 357)。一連の研究の成果を議論の接ぎ穂として援用しつつ、小論では BCYS を解読する。

- 6) 高山宏は「円環という倦怠のイコノロジー」を掘り下げて、〈倦怠 - 驚異〉が複層的にもつれ合う19世紀末の諸相を文化史研究の視座から網羅的に考察している（『目の中の劇場』322-68）。

引用文献

- Anderson, Norman D. *Ferris Wheels: An Illustrated History*. Bowling Green: Bowling Green State UP, 1991.
“Atrocious Assault on a Lady Cyclist.” *Illustrated Police News* (1897).
Benfey, Christopher. *The Double Life of Stephen Crane*. NY: Alfred A. Knopf, 1992.
“The Bicycle Problem.” Cartoon. *Puck* (38 October 1895): Centerfold.
Bierce, Ambrose. *The Unabridged Devil’s Dictionary*. Ed. David E. Schultz and S. T. Joshi. Athens: U of Georgia P, 2000.
Brown, Bill. *The Material Unconscious: American Amusement, Stephen Crane, and the Economies of Play*. Cambridge: Harvard UP, 1996.
Cady, Edwin H. *Stephen Crane*. Boston: Twayne, 1962.
Crane, Stephen. *The University of Virginia Edition of the Works of Stephen Crane*. Ed. Fredson Bowers. Charlottesville: UP of Virginia, 1970. 10 vols. 1969-76.
The Cycle Poco Camera. Advertisement. 1899.
“Daring Robbery and Atrocious Cruelty by Cyclists.” *Illustrated Police News* (1897).
Davis, George R. “The World’s Columbian Exposition.” *North American Review* 154 (1892): 305-18.
“The Ferris Wheel.” *Manufacturer and Builder* 26 (1894): 157.
“The Ferris Wheel at the World’s Fair.” *Manufacturer and Builder* 25 (1893): 170.
“The Ferris Wheel Profitable.” *Manufacturer and Builder* 25 (1893): 225.
Flinn, John J. *Official Guide to the World’s Columbian Exposition*. Chicago: The Columbian Guide Company, 1893.
Friss, Evan. *The Bicycle City: Bicycles and Urban America in the 1890 s*. Chicago: U of Chicago P, 2015.
Green, Harvey. *Fit for America: Health, Fitness, Sport and American Society*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1988.
Griffin, Harry Hewitt. *Cycles and Cycling with a Chapter for Ladies, by Miss L. C. Davidson*. NY: Stokes, 1890.
Gullason, Thomas A. “The Sources of Stephen Crane’s *Maggie*.” *Philological Quarterly* 38 (1959): 497-502.
Holton, Milne. *Cylinder of Vision: The Fiction and Journalistic Writings of Stephen Crane*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1972.
Mayo-Smith, Richmond. *Emigration and Immigration: A Study in Social Science*. NY: Charles Scribner’s Sons, 1890.
Monarch Bicycles Are King of Them All. Advertisement. *North American Review Advertiser* 156 (1893): 43.
Monteiro, George. *Stephen Crane’s Blue Badge of Courage*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2000.
“The Parisian Scorchers.” *The Wheel and Cycling Trade Review* 5 (1890): 91.
Prout, H. G. “A Year of Railroad Accidents.” *North American Review* 154 (1892): 196-208.
Ramsey Swinging Pedals. Advertisement. 1900.
Riis, Jacob A. *Children of the Tenements*. 1904. Upper Saddle River: Gregg, 1970.
———. *How the Other Half Lives: Studies among the Tenements of New York*. 1890. NY: Dover, 1971.
Robertson, Michael. *Stephen Crane, Journalism, and the Making of Modern American Literature*. NY: Columbia UP, 1997.
Safest, Fastest and Finest Trains in America. Advertisement. *North American Review Advertiser* 157 (1893):

49.

- Sandoval-Strausz, A. K. *Hotel: An American History*. New Haven: Yale UP, 2007.
- Shaler, Nathaniel Southgate. "The Betterment of Our Highways." *Atlantic Monthly* 70 (1892): 505-14.
- Solomon, Eric. *Stephen Crane: From Parody to Realism*. Cambridge: Harvard UP, 1966.
- That You May Know Columbias. Advertisement. *North American Review Advertiser* 156 (1893): 42.
- Walker, Francis A. "Restriction of Immigration." *Atlantic Monthly* 77 (1896): 822-29.
- Wertheim, Stanley, and Paul Sorrentino, eds. *The Correspondence of Stephen Crane*. 2 vols. NY: Columbia UP, 1988.
- . *The Crane Log: A Documentary Life of Stephen Crane, 1871-1900*. NY: G. K. Hall, 1994.
- Wilson, Latimer J. *My Trip to New York: Notes and Impressions*. NY: F. M. Buckles, 1906.
- Wolford, Chester L. *Stephen Crane: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne, 1989.
- アーリ、ジョン&ヨナス・ラーソン『観光のまなざし』増補改訂版 加太宏邦訳 東京：法政大学出版局、2014。
- アンブローズ、トム『50の名車とアイテムで知る－図説自転車史の歴史』甲斐理恵子訳 東京：原書房、2014。
- 押谷善一郎『スティーヴン・クレインの眼』大阪：大阪教育図書、1995。
- 越智道雄『ワस्प（WASP）－アメリカン・エリートはどうつくられるか』東京：中央公論社、1998。
- 坂元正樹『19世紀イギリス自転車事情』東京：共和国、2015。
- 佐野裕二『自転車の文化史－市民権のない5,500万台－』東京：文一総合出版、1985。
- シヴェルプシュ、ヴォルフガング『鉄道旅行の歴史－19世紀における空間と時間の工業化』加藤二郎 訳 東京：法政大学出版、1982。
- 高山宏『テキスト世紀末』東京：ポラ文化研究所、1992。
- 『目の中の劇場』東京：青土社、1985。
- 天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし－再魔術化される観光－』奈良：天理大学出版部、2014。
- 富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』東京：青土社、1995。
- 増崎恒「『アフリカ』から読む Stephen Crane-19世紀末米国におけるツーリズム（リスト）とスラム街－」『追手門学院大学国際教養学部紀要』9（2016）：23-40。
- 吉見俊哉『博覧会の政治学－まなざしの近代』東京：中央公論社、1992。